

ブカレストの少年

ドリアン助川 (作家・道化師)

ベルリンの壁に穴があいたのは、1989年11月のことだ。私は27歳で、フリーの放送記者をしていた。ハンマーで壁をたたき壊している東ドイツの人びとを見れば、地球を二分してきた主義と主義のぶつかり合いに大きな変化が起き始めたのだと誰にでもわかった。年があけて1月末、私は在京ラジオ局の即席特派員として東欧に飛んだ。

目の前で起きていることを1日2回、つぶさに電話で伝える。ただそれだけの役目を負って、ベルリンの街をうろついた。現地の言葉はまったく出来ず、英語もまあ、人並みでしかない。本当に見たままを語るだけのレポートを続けながら、ベルリン、プラハ、そしてブカレストへと歩を進めた。

ルーマニアではチャウシェスク独裁政権の転覆を巡り、内戦が勃発していた。支配者一家は国軍により処刑されたのだが、散発的な銃撃戦はまだあり、ブカレストの街の大半は停電が続いていた。そこで私はたしかに見たのだった。暗がりやで、子犬を抱いたまま泣いている男の子を。

国際電話をかけただけで、闇ドル欲しさにホテルの従業員が部屋に押し掛けてくるようなブカレストの現状を私は東京に伝えた。しかしその男の子の話は伝えなかった。言葉がわからず、涙の理由を訊けなかったからだ。ひよっとしたらあの子の父親は、新体制によって排除された側の人間ではなかったろうか。

ソビエトの崩壊、ユーゴの民族紛争までを含めた一連の革命から20余年が過ぎた。あの頃の子どもたちも立派な大人になっているはずだ。今ならもう少しましな取材ができると思う。国際列車に乗り、ひとつひとつの街に降り立ちながら、これまでの日々のことを住民の皆さんに伺ってみたい。特に私が訊きたいのは、旧体制側にいた人びとだ。

あなたは何を信じ、どのようにして生きてこられたのですか？ どんな言葉が返って来ても、私はそれを正面から受け止めたい。

■ライブ

フォト・スラム「ブカレスト～プノンベン～チェルノブイリ～フクシマ」

出演：アルルカン・ヴォイス・シアター（ドリアン助川、ピクルス田村）

10/13 21:30- [F4] | 料金 2000 円（映画祭参加者は 1800 円）